学生の利用のために今ここでできること：私立総合大学の選書の立場から
－関西学院大学図書館の最近の取り組みを踏まえて－

伊　藤　幸　江

抄録：近年，大学図書館では学習支援や読書促進などの様々な取り組みが見られる。本稿では，人文･社会科学系学部が多い私立総合大学という立場から，関西学院大学の西宮上ケ原キャンパス大学図書館の学生用資料の選書を紹介する。具体的には，学習図書の選書と，教員推薦図書や新聞書評本，文庫による小説の導入，ラウンジコーナーの刷新などの最近の取り組みを取り上げる。それらを学生用資料の選書という視点で見直し，時代の変化と大学や学生の特色を踏まえた上で，独自の状況にあった学習･読書支援のための来館型サービスについて考える。

キーワード：選書，学習支援，読書支援，大学図書館，私立大学，人文･社会科学系，関西学院大学西宮上ケ原キャンパス大学図書館，来館型サービス

はじめに

近年，大学図書館では学習支援や読書促進などを目的に選書ツアーを始めとした学生ニーズの積極的な活用[1) 2) 3) 4)]や，学習環境向上のためのラーニング･コモンズ設置[5)]などが盛んである。そして，これらの視点からの大学図書館の選書の論考[6)]や，精細で組織的な学習用資料の選書事例[7)]なども紹介されている。つまり，選書は大学図書館の学習支援や読書促進のために重要な業務であるといえよう。

本稿では大学図書館の学生へのサービスにおいて，選書業務で何ができるのかについて考える。特に，筆者が勤務する関西学院大学西宮上ケ原キャンパス大学図書館の最近の取り組みを踏まえ，学生用資料の選書という視点から，大学図書館の学生への来館型サービスについて考えたい。

1. 関西学院大学の選書の概要

1.1　対象分野と資料ニーズの特徴

関西学院大学は11学部，1独立研究科･2専門職大学院を持つ私立の総合大学である。2008年度より3年連続で学部増設をし，教育学部は聖和大学との法人合併とともに設置された。

11学部中理系は理工学部のみで，筆者の勤務する西宮上ケ原キャンパスには人文･社会科学系の8学部（神･文･社会･法･経済･商･人間福祉･国際）があり，学生約23,600名（含院生約1,500名）中，約19,000名が在籍している。神戸三田キャンパスには理工･総合政策の2学部があり，大学図書館分室が設置されている。西宮聖和キャンパスには教育学部があり，旧聖和大学図書館を改組した短期大学図書館がある。

西宮上ケ原キャンパス大学図書館（以下，当館）の蔵書数は約150万冊，学部構成から文系優位で，キャンパス内の全分野の資料を対象とする集中方式の大規模大学図書館である。

規模が近い総合大学でも，国立大学は学部数の文理比率が1：1に近いが，私立大学は文系比率が高い。文系は情報に理系ほどの速報性を求めず，長期利用し，図書の重要度が高い傾向がある[8) 9)]ようだ。当館は，分野では人文･社会科学系，対象利用者では絶対多数の学部生へのサービスが重要な課題である。

1.2　図書予算と選書方針

本学では図書館図書費を図書館と学部等で6：4に分け，図書館は教育・研究の基本資料と学生の学習･教養資料を，学部等は高度な研究用資料を選書し，資料はいずれも図書館に配架する。発注は図書館で一括して行い，年間新規発注件数は約2万件である。重複調査機能のある書店システム[10)]を用い，資料費抑制のため，原則として同一館内の重複購入は行わない方針を採っている。

1.3　学習図書の選書

学習図書は学習図書選書会で図書館員が選書し，館長の下の上位の選書会で教員の承認を受ける[11)]。学習図書選書会は全館体制の7名程のチームである。当館の2課中，内部業務を行う運営課の選書担当を事務局とし，他の業務担当や利用サービス課員が入り，利用ニーズの反映や他の業務との連携を図る。

図書館流通センターの『週刊新刊全点案内』を使用し，週1回約1時間半の会議で約150冊を選ぶ。この方式は業者委託による資料整理に連動して導入し，20年以上の歴史を持つ[12]。選書した資料は通常会議の翌日に発注し，委託整理された上で約1ヶ月後に納品･配架となる。

選書対象は授業カリキュラムに沿った新刊国内書が中心である。このため，趣味･教養的なものや話題本などはあまり選書しない。教養資料は新書・文庫等シリーズ単位での選定が多く，小説も全集等で選書する程度で，単行書はほとんど選定していない。

2. 二つの利用者調査の結果から

当館で学習図書以外の学生用資料の選書を考えることになったきっかけは，2004年度と2008年度に実施した学生対象の利用実態調査[13][14]である。

調査結果中，学生の蔵書へのニーズで最も顕著だったのは，小説・一般書・ベストセラー・文庫が少ないという意見であった。概観したところ，蔵書関連の意見の中では「読み物」資料の不足を訴えるものが，2004年度・2008年度ともに最多であった。

また，大量の新刊書を毎週選書し，迅速に提供しているのに，2004年度調査では「新しい本がない」という意見が散見された。新着本が当該書架にすぐに配架され，既所蔵資料に埋もれていたためである。2006年度に新着図書を1週間展示するコーナーを設置すると，2008年度調査では新しい資料がないという記述はほぼなくなった。むしろ，資料が充実し購入希望する図書がないという意見が多く見られた。

しかし，「読み物」資料のニーズは依然強く，これは意図的に選書していないことが原因である。選書方針の改革が求められていた。

昨今，大学図書館では学習支援に加え，若者の読書支援もそのサービスに包括する動きがある。読書支援が読書促進の場合もあるが，「読みたい!」というニーズに応え提供することも支援であろう。そして，これは選書業務が大いに関与できる来館型サービスである。このことから，予算の制約の中で学習・研究支援のための蔵書構築を継続しつつ，視点を変えた工夫で学生の読書支援を行うことになった。

なお，このアンケート結果に，館員からは「なぜ学生は『大学図書館』に小説やベストセラーがあって当たり前だと思うのだろう？」という声も出た。どうやら館員と学生は「図書館」に対するイメージが違うようである。育った時代や環境などから，今の学生世代と図書館との関係を見てみたい。

3.「今」の学生を調べる

3.1 世相やマーケティング調査

現在の学生を18～22歳として考えると，1990～1994年（平成2～6年）生まれとなり，バブル終焉期に誕生している。そして，ゆとり教育を受けた世代であるため，最近のマーケティング調査等ではこの世代を「ゆとり世代」とか「おゆとりさま」と呼ぶ。

「ゆとり世代」は消費欲求が低い傾向があるが二極化し，周囲のまねや流行ですます層と興味のあることは追求する層がある。衣食住より体験消費を重視し，以前の若年層ほどには本や音楽等へのこだわりがなくメジャー作品への一極集中が激しい。過剰に他人の目を気にする過剰同調性がある[15]という。

また，「おゆとりさま」はモノにあふれた時代に生まれたため，物欲よりコミュニケーション欲が強く，消費にはインパクト（話題性）やつながりを重視する。ネットで下調べの上，実店舗で選ぶなど要領がよく，全ての行動をコストパフォーマンスで決める等，与えられた権利を無駄にしない考え方がある[16]という。従来の学生と若干違う傾向を持ち，二極化のどちらの層が大学に多いかで状況が違うことも推測される。

今の学生の育ってきた時代を見るため，物心がついた小学校低学年頃（1996～2003年）の社会情勢や流行を調べた[17]。この時代のキーワードといえるのは「デジタル」「携帯ツール」「ゲーム（バトル）」「ファンタジー・バーチャルリアリティ」「不況」「オンリーワン」「エコ」「セキュリティ」等である。

1996年の時の商品はデジタルカメラ，デジタルビデオカメラや携帯電話で，幼少期からそれらに身近に接していた。2003年度開始の高校の「情報」の授業でデジタル情報の利用についての教育も受けている。1997年の流行語に今も低学年に人気のポケモンがあり，幼少期からゲームでのバトルが普通であった。加えて，ハリー･ポッターブームによるファンタジーや，映画やゲームによるバーチャルリアリティが身近だった。不況の時代の中で，2003年レコード大賞の「世界に一つだけの花」のようにナンバーワンよりオンリーワンとして，そして，リサイクルやエコという資源還元型社会の思想の中で育っている。また，2001年の附属池田小事件等の影響から高いセキュリティ環境で育てられた。

教育では絶対評価の導入後で，ゆとり教育の反動からか習い事や早期教育が活発になった。中1～高1である2006年の調査[18]では，文化系やスポーツ系の習い事も多く，調査対象の半数以上が小学3･4年以下から塾に通い早期教育化が感じられる。幼児

用通信教育で有名な「こどもちゃれんじ」も1988年開講のため，受講していた可能性もある世代である。

つまり，情報化社会で多くのことの吸収が不可欠かつゆとり教育の反動で，知育もスポーツ等も早期から効率的に教育された子どもが多い。効率重視でマニュアルを示されて育ち，試行錯誤して見つける経験は少ない可能性がある。反面，二極化し，成熟度の高い主体性を持つ層もいる[19]のは，自主性を重視する国際感覚の英才教育の結果かもしれない。

3.2 育ってきた時代と接してきた図書館

若者は本を読まないというが，学生の乳幼児期頃から，子どもへの読み聞かせが盛んになっている。子どもへの読書支援の追い風となったのは，1993年の「子どもと本の出会いの会」や「子どもと本の議員連盟」の発足のようだ。また，子ども読書年の2000年に子どもの読書活動推進のための基本的な計画や法律が制定され，環境が整備された。学校図書館も充実が図られ，1993年の学校図書館図書整備新5か年計画で地方交付税により公立学校の蔵書を1.5倍にすることが目指された。司書教諭の配置猶予を2003年より外すことも1997年に決まった[20]。

毎日新聞社実施の読書世論調査の「学校読書調査」によれば，ここ10年は中高生の本を読まない層が減り，特に中学生は読書量が増えている。学校での読書推進に加え，ケータイ小説の普及や人気シリーズ本の効果，小学生時代からの読書習慣，友達からの口コミなどが原因[21]のようだ。しかし，自主的には読まない層もあるため，読書冊数が多い層と少ない層の二極化が見られる。

また，2000年の公共図書館の設置率は，市や政令指定都市などはほぼ100%に近く，全体でも館数は20年前の約2倍，資料費予算は3倍弱となっている[22]。地域差はあるものの，学生の子ども時代には，全国的にかなり公共図書館の整備がすんでいたといえる。サービス面でも，2003年調査では市区町村立図書館の99.8%が児童サービスを行い[23]，ヤングアダルト・サービスの実施率も1992年の25.7%から2002年は40.8%[24]へと伸びている。読みたいものが身近な図書館で利用できた世代といえよう。

今の学生は，本や図書館に関する体験が乳幼児期の読み聞かせに始まり，以前より充実した学校図書館と一定の整備後の公共図書館を身近に利用し，図書館で読書することを強く推奨されて育った。かつての「ノートとインクの匂いがする」学習用図書館のイメージはなく，小説などの「読み物」資料がない図書館など図書館ではないのかもしれない。

4. 選書にかかわる新しい取り組み

今の学生が図書館に「読み物」資料があって当然と考えているのにそれを提供しないことは，学生を図書館から遠のかせてしまう。しかし，同時に大学図書館は何をするところなのかも伝える必要がある。

当館では，現在の図書館を開館した1997年より全面開架制を導入し，極力コーナー配架を避ける方式を採ってきた。しかし，自分でOPACを検索し，自分で書架に行き，自由に利用できる体制を整えるだけでは不十分なことが明らかになった。

特に効率重視の時代に育った学生は，一から試行錯誤して自分で見つける体験が少なく，手がかりがある方が親しみやすい。口コミや推薦などでつながりを感じられることも効果的だろう。

これらを踏まえ，当館では従来の学習図書の選書範囲の伝統は変えず，他大学の事例も参照しながら「親しみやすい資料」を新たな方法で選書し，コーナー配架する方法で学生の要望に応えることとした。

4.1 親しみやすい図書を集めたコーナーの設置[25]

2009年度より教育・研究・学習に限らない幅広いジャンルの図書を集めたコーナーを二つ設置した。これらは読書の楽しみを知る機会を提供し図書館に親しみを持ってもらい，利用を促進することを目的とした。予算は既存の収集資料の見直しを含む予算調整で捻出して実現した。なお，当館では表紙のブックカバーを外す装備が基本であるが，これらの資料は表紙が確認できるようカバーを残して展示配架をし，通常配架分との重複も可としている。

①「先生のおすすめの本」コーナー

全専任教員に呼びかけ，学生の読書用図書を学期ごとに推薦してもらっている。各回50タイトル前後の小説・エッセイ・名著・マンガ等，多岐に渡る推薦があり，各図書と共に教員の名前と推薦文のプレ

写真1 「先生のおすすめの本」コーナー

ートを展示して配架している。利用は学部生･大学院生に限っている。

②「新聞書評掲載図書」コーナー

毎週日曜の新聞書評欄掲載図書を集めたコーナーで，当館では読売新聞，神戸三田キャンパス図書メディア館では朝日新聞の書評に掲載された図書が対象である。これらは選書対象が明確であるため，全面的に委託による選書と整理を取り入れ，書評掲載から約 2 週間で配架，原則過去 1 年分を提供する。

写真 2　「新聞書評掲載図書」コーナー

4.2　学習支援のための新しい資料群

読書支援のみならず学生の学習ニーズを反映し，2010 年度より新しい学習支援のための図書を提供している。

①「レポート・論文作成関連図書」コーナー

新入生はレポート作成にとまどうことが多い。このため，数年前からレポート作成をサポートする講習会を入学直後のオリエンテーション期間に実施している。それと連動するレポートや論文作成関連の図書を複本購入し，コーナーを設け提供することになった。新入生向けの比較的入門的な図書を利用担当が選定し，特に年度始めに活発に利用されている。

写真 3　「レポート･論文作成関連図書」コーナー

②「英語多読本」の提供

言語教育科目に関連する図書･資料の必要性から，ペンギンリーダーズなどの英語多読本 4 種類の提供を行うこととなった。授業連動の資料であるため，特に国際学部の学生の利用が非常に活発である。

4.3　小説等の文庫「新潮文庫」の追加

利用者からの小説等のニーズが大きかったため，2010 年度より刊行の歴史が長く人気のある名作が多い新潮文庫を「読み物」資料として追加した。当館ではこれまでも 30 種余りの新書文庫をコーナーで提供し学部生によく利用されていた。しかし，教養書が中心で小説を含むのは岩波文庫ぐらいだった。

読書支援の目的から，発注時点で流通している全点約 2,950 タイトルを一括購入し，今後の刊行分も継続購入することとなった。比較的安価な文庫とはいえ，2 キャンパス分約 6,000 冊を揃えるのはかなりの予算が必要だったが，図書費予算「最後」の繰越金を活用した。本学では 2008 年度まで図書費予算を次年度以降に繰り越すことができたが，2009 年度より廃止となった。この予算緊縮は痛手であったが，逆転の発想で繰越金の蓄積を有効活用する資料の一つとして選定した。図書館独自の選定資料としてはタイトル数が多く，従来とは大幅方向転換の選書だったが活発な利用が見られる。

4.4　ラウンジの刷新：　学生生活のための図書

当館には気軽に読める図書･雑誌を消耗予算で購入・配架するラウンジというコーナーがある。「通常の登録資料とは異なり，特色のある時事性の強いものを中心に収集，配架する」のが設置の意図だった。

しかし，実運用で提供した図書は，留学，資格取得，コンピュータや旅行のガイドという比較的無難な短期保存用資料だった。また，消耗図書のデータを作成しない方針から OPAC で検索できなかった。この結果，常に新版に買い替えていた旅行ガイドも存在を知る人のみの利用に留まり，多数あるコンピュータ関連のガイドも近年学生の貸出がなかった。

一方，雑誌は情報誌やファッション誌が多数あり利用は活発だったが，Web 情報の充実で情報誌等の改廃が頻繁で，提供タイトル数の削減が必要だっ

た。

この状況の中，2010 年夏の図書システムリプレースで他キャンパス資料の取り寄せを利用者自身が簡便に OPAC で行えるようになった。そして，館員の予期せぬものが短期大学図書館から多々取り寄せられるようになった。具体的には，旅行ガイド，小説，就職関係の図書，時事的な図書，児童文学などである。特に旅行ガイドはラウンジに最新版があるにも関わらず古い版を取り寄せていることが多く，早急にデータを作成し公開することが課題となった。

また，利用者がその資料を OPAC から取り寄せたということは，その資料が「図書館にある」と思い検索したということである。利用者が「大学図書館」にこれらの資料が当然あると考えていることも館員達を驚かせた。資料の充実した学校図書館や公共図書館に接して育った学生世代は，図書館のイメージの基本が「市民の図書館」のようだった。

これらを受け，2011 年度からのラウンジの刷新に向け，ワーキンググループで検討を行った。データの OPAC 公開，カバーを残す装備と共に，ラウンジ雑誌架を一部転用し展示的配架も行うことになった。

選書は無難な短期利用の資料を選ぶ方針を一転させ，学習用とは切り分け「学生生活のための図書」を選書する視点にシフトした。カテゴリーは，留学資料，旅行，生活，趣味，アウトドア･スポーツ，IT･Web･コンピュータ，資格取得関連，時事問題，就職活動で，原則 1 年で更新することにした。

写真 4　ラウンジ

全館体制で各業務担当の館員 10 名が店頭選書を行った。複数で同じカテゴリーを見るよう分担し，事後にバランスやカテゴリーをチェックして調整した。現物確認の上で，設定カテゴリーを的確に選書するためである。この刷新により西宮上ケ原キャンパスでは，約 1,500 点の資料を新規に選定し，一部既存分も加え，約 1,800 点の資料を配架した。

なお，予算的にはその年に消耗図書費の大幅削減があり厳しい状況だった。しかし，その削減対応策で中止した高額資料の差額を従来の予算に追加することにより捻出した。

以上の六つの取り組みのうち，「先生のおすすめの本」「新聞書評掲載図書」「レポート･論文作成関連図書」「英語多読本」は，利用ニーズを受け，他大学の例にヒントを得て行ったものである。

新潮文庫の追加とラウンジの刷新は本学独自の事情や状況から行っている。このため，この二つについて，貸出データによって現時点の評価を行い，今後の展望を考えたい。

5. 新潮文庫導入とラウンジ刷新後の変化

2011 年 8 月現在，新潮文庫導入から 1 年強，ラウンジの刷新からは約 4ヶ月が経過した。これらの取り組みの厳密な評価には，時期的な傾向にも配慮すれば，少なくとも 1〜2 年は必要である。しかし，特にラウンジは，配架期間が原則 1 年で，店頭一括選書を行っているため，早期に利用傾向を把握し，来年度の選書方針を立てる必要がある。このため，変更当初の 4ヶ月の利用状況を概観する。

なお，比較分析を行うため，ラウンジに合わせ，春学期（4〜7 月）4ヶ月間の当館の貸出データを参照する。構成員比率から当然だが当館最大の利用者層は学部生である。学部生が貸出の 7 割前後を占め，院生が 1 割前後，教員を含むその他の利用者が 2 割前後となっている。

5.1　学部生の学部別貸出分野の分布

図 1-1〜3 は 2011 年度春学期の学部生の貸出データを，学部別に分野の分布を見たものである。

共通して多いのは「総記･情報」と「レクリエーション」（スポーツ･娯楽分野に該当；以下，レクリエーションと表記）である。この多さの要因は，「総記･情報」には新書文庫が全て含まれているためであり，「レクリエーション」には人気の館内利用資料である視聴覚資料の大半がこの分野になるためであった。また，所蔵冊数の割にラウンジ図書と新聞書評本がよく利用されており，ニーズが高いことが分かる。

各学部とも専門分野と近接分野での利用が多くなっている。特に文学部は人文科学分野の専修が数多くあるので利用分野も多岐に渡り，学生数が多く文献資料をよく利用する分野も多いため，貸出冊数も多い。国際学部は 2010 年度開設で現在まだ 2 学年しかいないが，「外国･比較語学」が比類なく突出

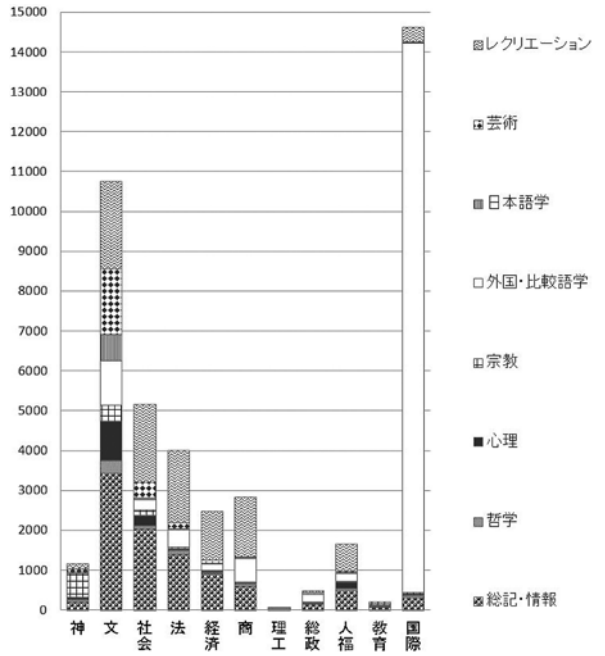

図 1-1　2011 年 4～7 月学部別貸出（学部生－分野別）：総記・人文科学①

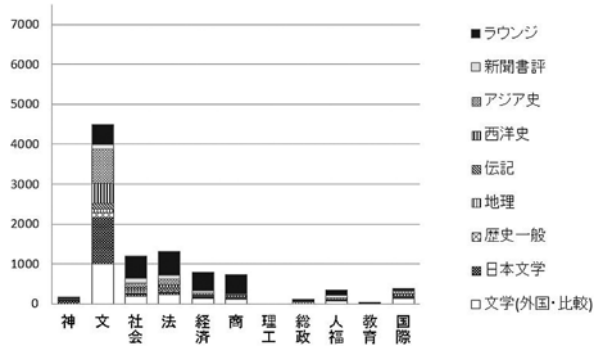

図 1-2　2011 年 4～7 月学部別貸出（学部生－分野別）：人文科学②・ラウンジ

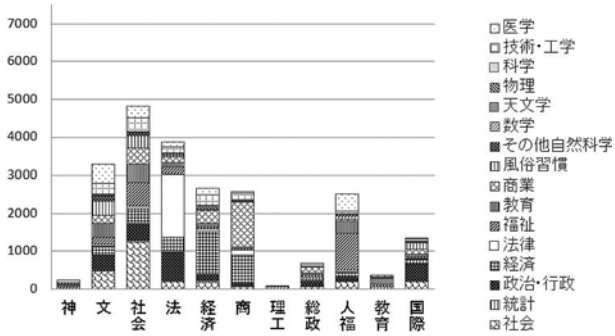

図 1-3　2011 年 4～7 月学部別貸出（学部生－分野別）：社会科学・自然科学

している。これは授業での課題とリンクする英語多読本の利用が群を抜いて多いためである。

社会･法･経済･商学部の社会科学系 4 学部は，いずれも学生数約 2,800 人であるが貸出冊数には違いがあり，多い順に社会･法･経済･商学部となっている。そして，各学部の貸出傾向が各専攻分野で一般的にいわれる図書の利用傾向[26] と一致しており興味深い。

社会学部は扱うテーマが多様かつ文献を利用した研究もよく行われるため，文学部に次ぎ貸出が多い。法学部は学部の専門分野の貸出が突出して多く，唯一専門分野の貸出が「総記・情報」や「レクリエーション」をしのぐが，他分野への貸出の広がりは少ない。経済学部と商学部は隣接分野であるため，学部分野の次に相手の分野の貸出が多く，「自然科学」や「技術･工学」の貸出が他の社会科学系学部より多い。

学部生の春学期の貸出冊数は昨年度に比べ増えているが，約 3,000 件貸出があるラウンジ図書よりも英語多読本がその増加要因で，それ以外の学生の貸出冊数は減っている。これは紙から電子へシフトという時代の流れにも一因があるのかもしれない。

5.2　春学期の学部生の新書文庫別貸出の分布

図 2 は，当館での学部生の新書文庫の貸出データの分布を，2009 年度から 2011 年度 3 年間の春学期について示したものである。

2010 年度と 2011 年度のデータから明らかなのは，新潮文庫のシェア率の高さである。学部生の新書文庫利用の約 4 割を占め，突出した貸出数を誇っている。学部生の貸出数全体から見ても，2010 年で 6%弱，2011 年で 5%弱を占める冊数になる。また，新潮文庫の導入によって他の新書文庫の貸出が減ったというより，利用率を維持しながら新潮文庫の利用が純増している。新潮文庫は学部生以外の利用も多いが，学部生比率の 8 割は貸出全体に占める学部生比率の 7 割より多い。

新潮文庫の導入に際し，一般的な広報を学内新聞や新入生オリエンテーションや館内掲示で行ったが，読書推進キャンペーン等の積極的な働きかけは特に行っていない。しかし，潜在的な小説へのニーズの高さからこの結果となったのではないかと思われる。

5.3　2011 年春学期のラウンジ図書の利用状況

ラウンジ図書の貸出を利用者の所属別に見ると 7 割以上を学部生が占める。これは学部生の利用を意図した選書にかなっているが，貸出全体での学部生比率とほぼ同等なため人数比率による傾向でもある。しかし，貸出全体の 1 割強を占める院生比率がここでは 5% 弱で，その他の利用者（職員･関連機関の構成員･卒業生･一般公開等）の利用が 2 割近く

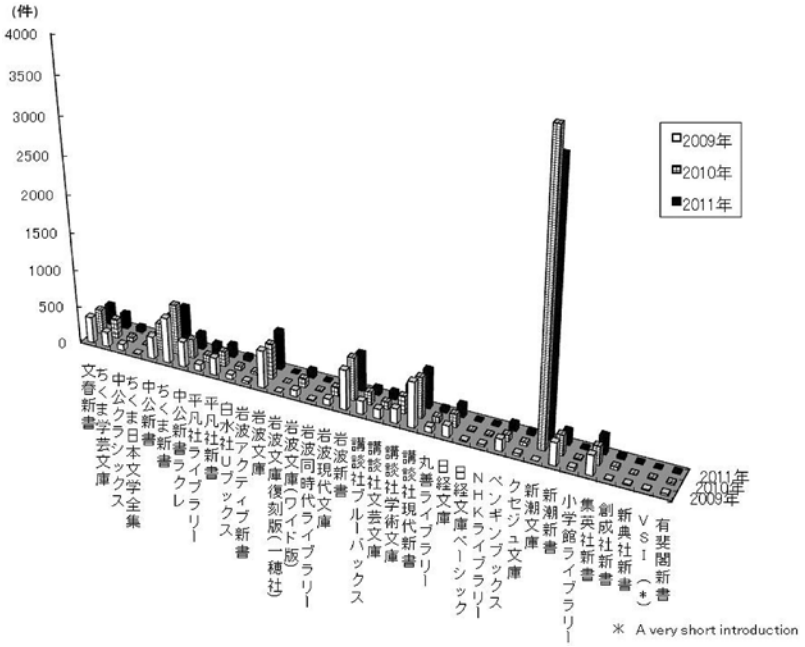

図 2　4～7 月新書文庫学部生貸出内訳（2009～2011 年 3 年比較）

になっていることから，公共図書館的な利用ニーズに合う資料であることが確認できる。

図 3-1 は学部生のみのラウンジの貸出冊数を学部別･分野別に見たものである。なお，ラウンジでは，利用目的からの独自のカテゴリー分類を行っている。

利用されている分野を見ると，「時事問題」「旅行」「就職活動」の貸出冊数が突出して高い。実際，これらの分野は稼働率が高く書架に空きが多いため，予想された結果であった。なお，5 月末の段階では，「旅行」がこれほどは多くなかったので，季節的な変動もあることが分かる。そして，学部生に「就職活動」のニーズが高いことは想定されていたが，この結果によってそれがますます明らかになった。

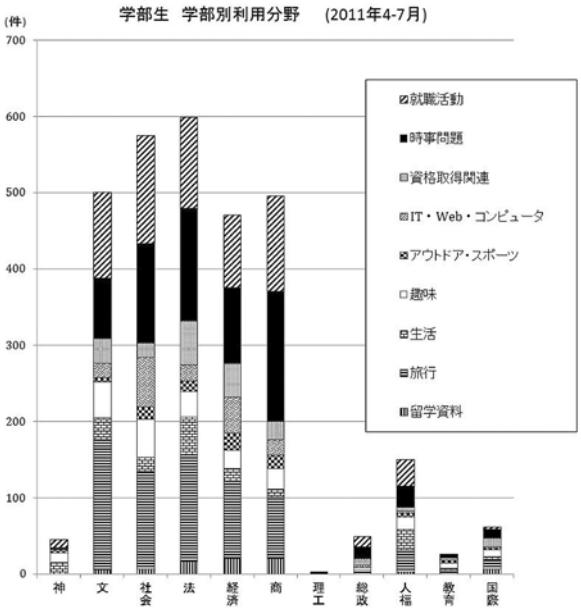

図 3-1　2011 年 4～7 月学部別ラウンジ図書貸出（学部生）

学部ごとの貸出冊数を見ると，法学部が最も多く，次に社会･文･商･経済学部となっている。5 月末時点では法･商･文･経済学部の順だったので，本当の傾向はもっと長いスパンでの把握が必要であろう。ただ，文･社会･法学部は元々貸出の多い学部のため当然ともいえるが，経済･商学部が資料全般では 6～7% 程度しか占めていないのに，ラウンジ図書では 16～17% を占めているのは興味深い。特に商学部は「時事問題」の利用が他の学部よりも多く，学習図書ではあまり選書しないトレンドを反映した図書が，ビジネスなど実学分野を専攻する学生のニーズや興味に合ったことが考えられる。

ただ，今回のデータは 4ヶ月のみであり，1 冊の本が常に貸出になったとしても，貸出期間 14 日の学部生に貸出できる回数はせいぜい 8～10 回である。また，その分野の所蔵冊数も貸出冊数に反映される。このため，2011 年 7 月末現在の分野別の所蔵冊数に対する貸出数の比率を出したものが**図 3-2** である。

ここでは貸出率は貸出冊数とはかなり違う傾向が見られる。厳密には個別資料までの参照が必要だが，大まかに分野で見た場合，次のようなことがいえる。

最も貸出率が高いのが「就職活動」，次いで「時事問題」となり，この二つは 250% を超え特に人気

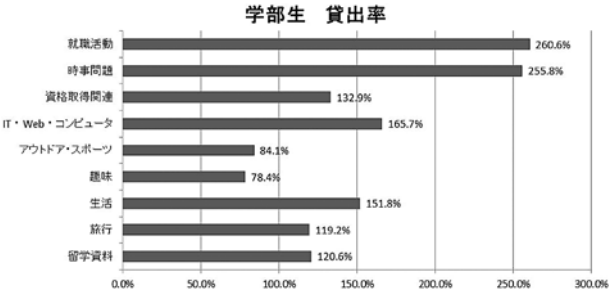

図 3-2　ラウンジ図書分野別貸出率（学部生）

がある。続いて，「IT･Web･コンピュータ」や「生活」など，元の冊数が少ないため率として高くなったものがある。「IT･Web･コンピュータ」はソフトのマニュアル本は入れず，最近のトピックについての読み物や情報本が中心で，スマートフォンや電子書籍の過渡期であるため人気があるのかもしれない。「生活」はこれまで提供していなかった分野であるため，ニーズがあったことが分かり興味深い。料理本が最も人気でどの学年も利用している。インテリアは上級生に人気があり１年生の利用はほとんどない。

4ヶ月の傾向ではまだ判断できない部分も多いが，学習図書選書会メンバーで見た結果，ニーズの高い「就職活動」については学習選書に合わせ毎週新刊書を選書することにした。また，「時事問題」についても年１回の選書では内容が陳腐化するため，書店の売り上げランキング等も参照し，重点的に高い頻度で選書することとした。「旅行」は従来からシリーズを決め新刊で選書してきたが，ニーズの高さが確認できたため，この方針の踏襲が適切である。「IT･Web･コンピュータ」は類書が多いため，それらの比較ができる店頭選書で選書することとした。

6. まとめと今後の展望

6.1　選書が学生へのサービスで出来ること

本稿では，今の学生世代の特徴や育ってきた時代，読書環境を概観した上で，当館の選書に関する最近の取り組みについて述べた。これらはこれまで授業･学習支援が中心であった当館の学生のための資料の選書が，社会の流れや学生のニーズによって，一つの転換期を迎えていることの確認でもあった。

電子的な非来館型サービスが拡大していく中で，大学図書館はその提供資料で学生の読書ニーズを充足させ，図書館への吸引力とし，来館型のサービスも活性化させることが重要になってきている。学生は幼少期からの読書指導や充実した学校や公共の図書館の利用経験により，図書館は楽しい自由な読書を保障する場所という印象を持っている。それを裏切らないことも大学図書館に求められるようだ。

長年読書支援に取り組まれてきた大学も数多くあるとは思うが，限られた予算の中で第一はやはり学習･授業支援のため，当館と似た状況の大学もあることと思う。そして，学習のためによい資料を集め，検索しやすいデータを作り，書架やパスファインダーを整え，効果的な検索方法を利用教育で熱心に伝えてきたが，あと少し必要なことがあったのだろう。

読み物や柔らかい内容の資料を入れれば利用が伸びるのは当然かもしれない。しかし，学生は本を読まないとか，若者に人気なのはケータイ小説やライトノベルといわれる中で普通の小説や時事資料等でも十分吸引力になるという見方もできる。そして，選書と利用の連動によるコーナー資料の提供は，自分で試行錯誤する経験が少なく効率重視で育った世代には，資料に触れるよいきっかけとなる。また，選者の顔が見える教員推薦本や新聞書評本は，学生世代の「つながり」の感覚に合うのではなかろうか。

当館の取り組みは調査結果や利用実態を反映した利用業務の改善として導入したものが大半である。しかし，選書という視点は次のように捉えられる。利用ニーズを受け，新しい選書範囲を設定したり，目的によっては書評の執筆が可能な造詣の深い人物に選定を託したり，文庫の収録方針を基に文庫自体を選定することも大学図書館の選書である。そして，何を提供するのかを決めることが選書に出来ることであろう。

6.2　学生への来館型サービスのための協働

大学図書館が社会の変化と利用ニーズを踏まえ，資料を整えるのは重要であるが，独自で需要を拡大しても，授業に連動した英語多読本の利用を除けば，貸出件数自体は減少している点を忘れてはならない。電子環境の影響であるのか来館型利用は確実に変化している。そして，学生の図書館利用に最も影響力があるのは教員からの課題や指導や推薦等であろう。教員の学生指導に図書館をどう活用いただくのか，そのために図書館は何ができるのかを考えることは学生への来館型サービスにおいて不可欠であろう。

近年当館では，選書のみならず利用教育でも全館体制が進行している。2011 年度の新入生の利用教育は文献探索講習会に絞り，全専任館員 21 名を講師に総動員し，対象クラスの 93%，194 ゼミ 154 回，約 4,200 人に対し実施した[27]。講師の約半数が

利用の担当外の運営課員であったため，両課の共同作業で講習会のマニュアル化を行った。このマニュアル化には，目録業務等で全員が等質の業務を行う運営課の業務統制力が活かされた。まだ課題もあるが，アンケートでは講習会に同席した教員の反応も講師担当者の反応も概ねよいものであった。

2011 年度はレファレンスにも選書担当中 2 名が兼務で参加するようになった。従来から利用担当は選書に参加してきたが，その逆は初めてである。

いずれも人員逼迫が発端だが，利用者に接して得た経験を内部業務に直接反映するチャンスでもある。そして利用教育やレファレンスは図書館最大の営業活動といえるかもしれない。特に教員の同席を前提とした授業内での講習会の大規模な実施は，学生のみならず教員への PR 効果も期待できる。

図書館サービスの中核は蔵書[28] であるといわれる。しかし，その資料を活かすのは利用サービスである。そして，資料の収集・整理は利用のために行っている。内部業務担当が直接利用業務からフィードバックを受けたり，そのスキルを利用業務に反映したりすることは，結果的にサービス向上につながるといえる。つまり，利用のための積極的な協働が重要であろう。

それぞれの状況の中で，負の現状を正の改革に変える取り組みがまだまだできるのだと思う。そして，それを行うためには，同じ志を持ち協働が可能な一定量の人の力が大きな力となる。また，今後の進展には大学の一組織としての視点も必要であろう。

おわりに

本稿では，学生へのサービスにおいて選書業務で何ができるのかについて考えた。そして，選書では社会の流れを踏まえた上で，必要なことを利用から学び，改善を行うことによって利用に還元することが重要であるように思う。つまり，選書の問題は利用の問題でもあり，図書館全体や大学の問題でもある。よりよい図書館サービスの実現には，各担当の強みを活かしながら大きなミッションに向け協働することが一つの解決策といえるのかもしれない。

注・参考文献

1）福岡南海子. 学生選書を通じてより良い図書館を作るために：大阪産業大学綜合図書館「学生選書モニター」の事例報告と実施大学への調査結果（<小特集>選書）. 大学図書館研究. 2010, no.88, p.1-11.

2）志波原智美ほか. 大学図書館における学生のニーズを反映させた学習支援環境の構築：平成 16 年度から平成 20 年度に長崎大学附属図書館が実施した学生懇談会の過程と成果. 大学図書館研究. 2009, no.86, p.47-62.

3）山鹿砂預子. 法政大学図書館への“学生の声”分析レポート. 大学図書館研究. 2009, no.86, p.38-46.

4）田中均. 大学図書館における学生利用の促進についての考察. 學苑. 2005, no.773, p.1-9.

5）小圷守. 情報リテラシーとラーニング・コモンズ：日米大学図書館における学習支援（<特集>情報リテラシー）. 情報の科学と技術. 2009, vol.59, no.7, p.328-333.

6）上野友稔. 疑いをさしはさみうるものについて：大学図書館における選書（<小特集> 選書）. 大学図書館研究. 2010, no.88, p. 12-18.

7）丹羽展子 井上真琴. 学習支援のための選書を目指して：同志社大学図書館の試み（特集 選書の現場から）. 図書館雑誌. 2007, vol.101, no.6, p.362-364.

8）伊藤（村上）幸江. 人文・社会科学分野における主題に即した利用教育の検討：利用者研究と主題別情報探索法指導. 図書館界. 2004, vol.56, no.4, p.236-254.

9）伊藤幸江. 大学専任教員対象アンケート調査を実施して：大学図書館が把握しておくべきこと. 時計台. 2008, no.78, p.40-43.

10）浜田行弘. 図書館の選書・発注業務と書籍流通：ファイル共有とエクストラネット. 図書館界. 1998, vol.50, no.3, p.122-125.

11）小泉公乃. 蔵書評価法からみた図書館員と教員の選書：慶應義塾大学三田メディアセンターの事例分析. Library and information science. 2010, no.63, p.41-59.

12）桑代正一. 市販データベースを使って業務改善：関西学院大学図書館の場合（特集：図書選択の現状と課題Ⅱ. 図書選択の現状を考える）. 図書館雑誌. 1989, vol.83 no.11, p.706-707.

13）関西学院大学図書館.“2004 年度大学図書館利用実態調査報告書（抄）”.（オンライン）. http: //library. kwansei. ac. jp/about/activity/pdf/report2004.pdf,（参照 2011-10-24）.

14）関西学院大学図書館.“2008 年度大学図書館利用実態調査報告書（抄）”.（オンライン）. http: //library. kwansei. ac. jp/about/activity/pdf/report2008.pdf,（参照 2011-10-24）.

15）日本経済新聞社産業地域研究所. ゆとり世代の消費実態. 日本経済新聞社産業地域研究所, 2011, 222p.

16）牛窪恵. おゆとりさま消費：つながり・ツッコミ・インパクト. アスキー・メディアワークス, 2010, 207p.（アスキー新書 170）.

17）電通“広告景気年表”.（オンライン）. http://www.dentsu.co.jp/books/ad_nenpyo/index.html,（参照 2011-10-24）.

18）読売新聞“子どもの習い事に関する調査：goo リサ

ーチと読売新聞社による共同企画調査<第 24 弾>”.（オンライン）. http://research.goo.ne.jp/database/data/000384/,（参照 2011-10-24）.
19）日本経済新聞社産業地域研究所. 前掲 15）, p.8-12.
20）日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会. 図書館ハンドブック. 第 6 版補訂版, 日本図書館協会, 2010, 673p.
21）毎日新聞東京本社広告局. 読書世論調査. 2011 年版, 2011, p.69.
22）日本図書館協会. 日本の図書館. 2001, 日本図書館協会, 2001, 504p.
23）日本図書館協会児童青少年委員会. 公立図書館児童サービス実態調査報告：日本の図書館 2003 付帯調査. 2003, 日本図書館協会, 2004, 101p.
24）日本図書館協会児童青少年委員会, 大阪市立大学学術情報総合センター図書館情報学部門. 公立図書館におけるヤングアダルト・サービス実態調査報告. 日本図書館協会, 2003, 62p.
25）［関西学院］大学図書館利用サービス課. 大学図書館の新しい取り組みについて. 時計台. 2010, no.80, p.43.
26）伊藤（村上）幸江. 前掲 8）, p.238-241.
27）魚住英子. 初年次教育としての大学図書館における基礎演習対象講習会の拡充. 時計台. 2012, no.82, p. 38-42.（掲載予定）.
28）三浦逸雄, 根本彰. コレクションの形成と管理. 雄山閣出版, 1993, 271p.（講座図書館の理論と実際 2）

＜ 2011.12.19　受理　いとう　さちえ　関西学院大学図書館運営課＞

Sachie ITO

Book selection for students at Kwansei Gakuin University Library

Abstract：In recent years there have been a number of different efforts to support learning and increase the amount of reading done in academic libraries. This paper introduces book selection for students at Kwansei Gakuin University's Nishinomiya-Uegahara Campus Library, a private university with a large number of students in the Humanities and Social Sciences. Specifically, recent modifications include selecting books for students, including faculty recommendations and book reviews, buying paperback novels and updating a lounge corner. These activities were all reviewed through the perspective of book selection for students, based on changes through the years as well the characteristics of the university and its students, to provide materials that support learning and reading appropriate to the institution.

Keywords：selection / learning services / reading services / academic libraries / university libraries / private universities / Humanities and Social Sciences / Kwansei Gakuin University Nishinomiya-Uegahara Campus Library / in-library services